

宗尊親王家集外歌集成 (一)

緒言

鎌倉幕府第六代將軍宗尊親王は、同時代を代表する歌人であり、享年三十三という短命さにもかかわらず、膨大な詠作をもものしている。しかしながら、その研究は基礎的作業に於ても必ずしも十分な進展を見ているとは言い難いように思われる。

本稿は、前稿の「宗尊親王年譜」(本誌一、平六・二。前号表紙に印した刊月の三月は誤り)に引き続き、歌人宗尊研究の為の基礎資料を整えることを目的とするものである。

宗尊親王には、現存する家集として、『瓊玉和歌集』、『柳葉和歌集』、『中書王御詠』、『竹風和歌抄』があり(近時、別種家集の存在の可能性が報告されている^注)、定数歌として、『文応三百首』が存している。本稿では、上記諸集に所収する以外の宗尊の和歌を、集成することを企図するものである。もとより、遺漏・誤認もあろうが、今後とも補正を期しつつ、

中川 博夫
小川 剛生

大方の御批正と御教示をお願いする次第である。

なお、成稿過程について付言しておく。

中川と小川は、別々に宗尊詠の所在を調査した。その結果をもとに、中川が原稿を作成した(底本の選定や全体の構成は中川の判断による)。

(注) 久保田淳氏「古筆切」(読売新聞昭六三・一〇・二四夕刊)、同氏「中世和歌片々」(『和歌史研究会会報』九五、平一・六)、田中登氏「別本宗尊親王御集について」(『和歌文学研究』五八、平一・四)。

〔例言〕

一、宗尊親王の、現存家集および『文応三百首』に所収する以外の和歌の集成である。なお、贈答の場合は宗尊の相手の歌も掲出する。

一、掲出方法は、便宜上、①勅撰集②私撰集③それ以外（歌論・歌学書、物語、古筆切・断簡等）の順に、各々、宗尊詠を所収する各作品の成立の先後に従って、各作品毎に一括して挙げる。重出歌は、成立順序の早い作品の所に挙げ、その他には重ねて掲出しない。なお、重出状況については、家集等の所収歌も併せて別にまとめて記すことにする。

一、便宜の為に、全体に渡る通し番号を歌頭に付す。なお、一首の下に括弧に入れて新編国歌大観番号を記す。

一、各集の底本については、当該箇所^に記す。

一、底本本文を校訂する場合、その依拠本はその都度記す。

一、本文は、次の処置を施す。

*用字は通行の字体により、仮名遣いは歴史的仮名遣いに改める（右傍に原態を示す）。

*送り仮名を補う場合がある（右傍に圈点を付す）。

*清濁を分かち、読点を打つ。

*部立については、一連の最初の一首の前に記す場合と、

一首の下の括弧内に記す場合とがある。

*詞書・歌題については、底本の書式にかかわらず一首の前に二字下げで記す。当該歌以前に配された歌のそれがかかる場合は括弧に入れて示す。

*宗尊の作者の位置は、底本の書式にかかわらず一首の前に版面より一字上げにして、原則として各作品毎に初出の一首にのみ記す。ただし、異同がある場合はその都度括弧に入れて記す。なお、歌合等では作者一覧の位置に

よる場合もある。

*傍記・見せ消ち・符号・合点・貼紙等の底本の原状については、特に必要な場合以外は割愛する。

〔和歌集成〕

①勅撰集

○続古今和歌集（前田育徳会尊経閣文庫蔵伝藤原為氏筆本）

（秋歌中に）

中務卿親王

1しぐれぬとみゆるそらかなり鳴きていろづく山のあきの

むら雲（秋下・五〇七）

（題不知）

2ふゆきぬといはぬをしるもわがそでのなみだにまがふしぐ

れなりけり（冬・五四六）

天台大師を

3おとにきくたまのいづみのすゑよりやみのりのみづのなが

れそめけん（釈教・七九〇）

（百首歌中に）

4いぶき山みねなるくさのさしもこそわすれじとまでちぎり

おきしか（恋四・一二七三）

平重時身まかりてのち、仏事のおをりしもあめのふりけ

るに、平長時がもとにつかはしける

5 おもひいづる今日しもそらのかきくれてさこそなみだのあ
めとふるらめ (哀傷・一四七七)

山路時雨を

6 ここにてもそでぬらせとやよのうきめ見えぬやまぢの猶し
ぐるらん (雑上・一六一五)

○続拾遺和歌集 (同右蔵飛鳥井雅康筆本)

入道二品親王高野山にこもり侍りけるころつかはしけ
る 中務卿宗尊親王

7a いかばかり高野のおくの時雨るらん宮こは雲のはるまも
なし

返し

入道二品親王性助

7b しぐるらん宮この空におもひしれたか野は雪の雲ぞかさな
る (雑秋・六四二―六四三)

(だいしらず)

8 いはぬをばしらぬならひとおもひしに涙ばかりのなにかか
るらん (恋一・八〇〇)

(秋の歌の中に)

中務卿宗尊親王

9 こはぎはら夜さむの露のおきもせずねもせて鹿や妻を恋ふ
らん (秋上・三三四)

こしに侍りける比、中務卿宗尊親王の許に申しつかは
しける 参河

10a おもひやれいくへの雲のへだてともしらぬころにはれぬ
涙を

返し

10b うくつらき雲のへだてはうつつにて思ひなぐさむ夢だにも
みず (羈旅・五六三―五六四)

菖蒲を〔菖〕、底本〔昌〕を諸本により改める)

11 いつまでかあやめばかりのながきねを涙もしらぬ袖にかけ
けむ (雑上・二二八〇)

素暹法師わづらふこと侍りけるが、かぎりなきこえ侍
りければつかはしける

12a かぎりぞと聞くぞかなしきあだし世のわかればさらぬなら
ひなれども

返し

素暹法師

12b かくつらき別れもしらであだし世のならひとばかり何おも
ふらむ (雑下・一五一六―一五二七)

○新後撰和歌集 (宮内庁書陵部蔵吉田兼右筆二十一代集(五一〇・

一三三)本)

○玉葉和歌集 (同右)

卅首歌の中に 中務卿宗尊親王

13 梅がえのしほめる花に露おちて匂ひ残れる春雨の比(春上・

八二)

百首歌読み侍りける時

14 高砂の尾上はれたる夕暮に松のはのぼる月のさやけさ(秋

下・六二七)

秋雨を

15 雲かかる高ねのひばらおとたてて、村雨わたる秋の山もと

(秋下・七二六)

旅泊夕といふことを

16 くれぬとてとまりをいそぐ浦波に月のみふねぞいでかはり

ぬる(旅・二四四)

世をのがれて後、月前梅といふことを

17 梅が香はみし世の春のなごりにてこけの袂にかすむ月かげ

(雑一・一八五八)

前大僧正隆弁あづまへまかるとて、秋はかへりのぼる

べきよし申し侍りけるが、冬にもなりにければつかは

しける

18 秋風とちぎりし人はかへりこずくずのうら葉のしもがるる

まで(雑一・二〇三六)

山家の心を

19 山郷をうき世の外のやどぞとはすまで思ひし心なりけり

(雑三・二二一五)

寂恵法師世をのがれ侍りにける時つかはしける

20a すつる世の跡まで残るもしほ草かたみなれとやかきとどめ

けん

返し

寂恵法師

20b すつる世のかたみとみずはもしほ草かきおく跡もかひやな

からん(雑五・二四七四〜二四七五)

(述懐の心を)

21 いかにせんそむきて後の浮世をばすてなばと思ふなぐさめ

もなし(雑五・二五二八)

○風雅和歌集(同右)

十二月十七日立春節かたがへに外へまかりて、暁に

在明の月をみて

中務卿宗尊親王

22 入りがたのかげこそやがてかすみけれ春にかかれるあり明

の月(冬・八九〇。「かげこそ」、底本「月こそ」を諸本により改

める)

我若未忘世、雖閑心亦忙、世若未忘我、雖退身難藏、

といふ事を

23 そむくとも猶や心の残らまし世に忘れぬわが身なりせば

(雑下・一九四二)

文永九年二月十七日、後嵯峨院かくれ給ひぬとききて、
いそぎまゐる道にて思ひつづけ侍りける

24 かなしきは我がまだしらぬ別れにて心もまどふしののめの

道 (雑下・一九六八)

○新拾遺和歌集 (同右)

不偷盜戒を

中務卿宗尊親王

25 心なき春のあらしも山里の主ある花はよきてふかなん (釈教・一四八四)

山鶯を

26 さびしくて人くともなき山里に偽りしけるうぐひすの声

(雑下・誹諧・一九〇四)

○新後拾遺和歌集 (同右)

秋歌の中に

中務卿宗尊親王

27 この里は村雨ふりて雁がねのきこゆる山に秋風ぞふく (秋上・三二八)

文永二年二月、二所にまうでける時、伊豆の御山にたてまつりける卅首歌の中に

28 神もまた捨てぬ道とはたのめどもあはれしるべきことのはぞなき (神祇・一五二三)

○新統古今和歌集 (同右)

朝花といふことを

中務卿宗尊親王

29 見わたせば花より外の雲もなしなきたるあさのみよしのの山 (春下・一三三五)

月前旅行を

30 古郷の人の面かげ月にみて露わけあかすまののかやはら (羈旅・九九二)

②私撰集

○東撰和歌六帖 (島原図書館蔵松平文庫本(二二九・一九))

春

(立春)

三品之

31 雪のうち春に春するものは鶯のこゑとやいはむ霞とやいはん (二)

早春

32 あづまより関こえてくる春とてや逢坂山のまづかすむらん (二六)

(霞)

33 あしがきのまちかき山の朝がすみ春はきぬとや立ちへだつらん (一五)

(霞)

34 いつもたつあまのとまやの夕煙ふかきや春のかすみなるらん (二二二)

(子日)

35 あづさ弓春たつ野べの小松ばら千代のためしに今やひかまし (四二二)

(残雪)

36 時しらぬ山風さえて春もなほ^をふじのすそ野に残るしら雪 (五九)

(梅)

37 里はあれぬ春はむかしの春なれやかはらず匂ふ軒の梅がえ (六九)

(春月)

38 霞むともいかでしらし難波がた入江の月の影なかりせば (九三)

(春月)

39 春の夜の明がたちかき雪間より山のはみえて残る月かけ (九四)

春曙

40 いく里もおなじ眺めや霞むらん山の端とほ^をき春の明ぼの (二〇二)

(柳)

41 朝霞立田の岸の春風に乱れにけらし青柳の糸 (二二九)

(桜)

42 たちまよふ雲を桜と思ひしは花なきみねのよそめなりけり (二六五)

(桜)

43 よそにては花かと見えてたづねつる雲をあなたぞさくらなりける (二六六)

(桜)

44 越えきつる外山のみねのしら雲を花かとなほ^をもちちかへるかな (二六七)

(桜)

45 世をそむく道にはあらで吉野山花にふかくぞたづね入りぬる (二六九)

(桜)

46 これまでは花をしるべに尋ねきぬかへさはいかにみよし野の山 (二七〇)

(桜)

47 ちる花のかたみとも見んよし野山雲なはらひそみねの春かぜ (二二八)

(桜)

48 かづらきや高天の桜風ふけばよそに成り行く花のしら雲 (二二九)

(款冬)

49 くちなしにいかかにほはんももつてのいはれの池の山ぶきのほな (二八〇)

(藤)

50 むらさきの藤さく山の松の葉にいりひもかかる春のゆふぐ
れ (二九四)

○東撰和歌六帖抜粹本(祐徳稻荷神社寄託中川文庫本||福田秀一
氏「祐徳稻荷神社寄託中川文庫本「東撰和歌六帖」(解説と翻刻)」
〔国文学研究資料館紀要〕二、昭五一・三三)による)

(夏)

郭公

三品親王

51 我が宿に今かきなかん時鳥松にかかれる池の藤なみ (九七)

(郭公)

52 神なびのいはせの杜の村雨にはつ音をもらす杜宇かな (一
〇七)

〇七)

(盧橘)

53 時鳥なくやさ月の雨はれて風こそわたれ軒のたちばな (一
二四)

二四)

(菖蒲)

54 さみだれには末もみえず成りにけり入江のあやめみごもり
にして (二四三)

にして (二四三)

(秋)

萩

(三品)

55 音に聞く萩の上葉の風よりやめにみぬ秋としりはじめけん

(二二七)

萩

(三品)

56 さもこそは色ふかからめ紫のねはふよこのの秋萩の花 (二
二〇)

(雁)

(三品)

57 久かたのあまぎる霧の絶えまよりほのかにみゆる秋のかり
がね (二六六)

(月)

(三品)

58 村時雨そめて過ぎ行く雲間より木の葉にのこる嶺の月影
(二九三)

駒迎

(三品)

59 相坂の山べてらせる月影は関引く駒の数を見よとか (二九
七)

(霧)

(三品)

60 明石瀉こぎ行く舟のほのほのと見ゆるや霧の絶え間なら
ん (三一四)

紅葉

(三品)

61 見るままに色こそまされ夕時雨ふるの山べの秋のみぢば
(三三六)

(冬)

(枯野)

62 露ながら手折し秋や思ひ出づる霜枯れはつるのべの萩原
(三八五)

(枯野)

63 真葛原小野の浅茅も霜枯れてうらさびしかる風の音哉 (三

八六

(千鳥)

64 月影のさし出の磯のはま衛氷りてよする浪に鳴く也(四〇

三)

(千鳥)

65 霜枯れの玉江の蘆のよを寒み氷る汀に衛なく也(四一〇)

(氷)

66 卷向の檜原にさゆる山風や穴師の河のこほりなるらん(四

二六)

(氷)

67 衛鳴くさほの河風寒えぬらしさざれの氷解けやらぬ乞(四

二九)

(雪)

68 風さえてひさしく成りぬ白雪のけふ降りつもるかも瑞籬

(四五五)

(雪)

69 神代よりかはらぬ色も埋れてをしほの山の松の白雪(四五

六)

○新三十六人撰(静嘉堂文庫蔵本(五二〇・二〇))

鎌倉宮宗尊親王御歌

70 あきの夜は月にぞながる桜川はなはむかしのあとの白なみ

(五六)

71 しながどりみなのしば山雲きえてみなとにきよき秋のよの

月(五七)

72 にふの山あらしのながす紅葉葉にしぐれぬまきも色付きに

けり(五八)

○閑月和歌集(文化庁蔵高松宮旧蔵本Ⅱ写真による)

(題しらず)

73 すゑのまつなみこすやまになくしかはあだしごころのつま

やこふらん(秋下・二四三)

前大僧正隆弁、やよひのつごもりの日、あづまへくだり

はべりけるにつかはしける

74a いかにせむとまらぬはるのわかれにもまさりてをしき人の

なごりを

返し

前大僧正隆弁

74b めぐりこんほどもまつこそかなしけれあかぬみやこのはる

のわかれば(離別・三六〇〜三六一)

禅空上人ありまの湯へまかりけるときつかはしける

75a わかれをばしほしのほどとなくさめどさだめなきよはなほ

ぞかなしき

返し

禅空上人

75b わかれをばさだめなきよとおもふにぞしほしのほどもなく

さまれける (離別三七二―三七三)

75c あづまへかへりけるに、中務卿親王より、秋こし人の

はるのわかれを、とはべりければ 権少僧都円勇

あきはきてはるゆくかりのならひこそ身にしられてもねは
なかれけれ (離別・三五九)

○拾遺風体和歌集 (島原図書館蔵松平文庫本(一三〇・七))

別れの歌とて読ませ給ける 中務卿宗親王

76 かへりこん月日隔つなたちわかれいなばの山のみねのしら

雲 (離別・二二二)

藤はらの光俊朝臣都へのぼり侍りける時つかはしける

77 三とせまでなれしさへこそかなしけれせめて別れのをしき

あまりに (離別・二二六)

題しらず (宗親王)

78 あらましの庵の外山の秋の月おもふよりまづすむころか

な (雑・二七六)

樵夫 (宗親王)

79 みわたせば爪木のみちの松かげに芝よせかけてやすむ山人

(雑・四七七)

花巖経

80 いづくにも春は来ぬれどあさ日さすたかねよりこそ雪は消

えぬれ (釈教・四九六)

○夫木和歌抄 (静嘉堂文庫蔵本(二〇四・三九―四〇))

六帖題御歌、春の野 中務卿みこ

81 くだら野の萩のふるえのうぐひすも今ぞなくらし春の来ぬ
れば (春二・鶯・四三三)

六帖題御歌、春の風 (中つかさのみこ)

82 くもるとはみえぬものから夕暮のかすみよりふる春雨の空
(春二・春雨・九六四)

花の御歌の中に (中務卿ノ親王)

83 見わたせばしらゆふかけて咲きにけりかみをか山のはつぎ
くら花 (春四・花・一一二〇)

六帖題御歌、かにはざくら (中務親王鎌倉)

84 春をへてあれにし奈良のあすかにはさくらん花の色やさび
しき (春四・花・一一九二)

御集、花 (中務のみこ)

85 住吉のむかひの雲は花なれや潮風かをるあはち島山(春四・
花・二二三八)

六帖題御歌、ひざくら (中務のみこ)

86 爰にしもいかで咲き剣けぶりたつ浅間の山のひざくらの花
(春四・花・一三七〇)

御集、深山花 (中務みこ鎌倉)

87 思ひやる高野のおくの山ざくらわがあらましの春やまつら
ん (春四・花・一五三四)

六帖題御歌、なぎ (中務卿みこ鎌倉)

88 ゆきてはや衣にすらんなはしろのこなぎ花さくときもきぬ
らし(春五・苗代・一八九〇)

六帖題御歌、更衣

89 たちなれしかすみは雲になりにけりあまつみそらもころも
がへして(夏一・更衣・二三〇三)

後鳥羽院の御影の御前にて講ぜられける三首歌、名所

郭公

(中務卿のみこ)

90 水無瀬山昔のあとのほととぎすしのぶにたへぬねをやなく
らん(夏二・郭公・二八八〇)

御集、郭公

(中務卿のみこ鎌倉)

91 時しらぬ富士のたかねの郭公雪のうちなるこゑもめづらし
(夏二・郭公・二九一〇)

家集、桑門

(中務のみこ)

92 なる神のおとはのたきやまさるらん関のこなたのゆふだち
の空(夏三・夕立・三五七三)

六帖題御歌

(中務卿親王)

93 いにしへのつげののみかりそれよりや氷室のおものたては
じめ剣(夏三・氷室・三七一六)

秋御歌中

(中務卿のみこ鎌倉)

94 露むすぶかたちの野べのをみなへしたまをかざれるあさば
らけかな(秋二・女郎花・四二四九)

御集

(中務卿のみこ)

95 はこね山ふもとの野辺のをみなへしたがまくあはの色にさ
くらん(秋二・女郎花・四三一八)

六帖題御歌

同(中務卿のみこ)

96 たまだれのこすの大野のをみなへし白露かけてさきにけら
しな(秋二・女郎花・四三二九)

御集

(中務卿のみこ)

97 あすか川ゆき来のをかの花すすきまねくたもとに露ぞこほ
る(秋二・薄・四三四三)

六帖題御歌、秋野

(中務卿のみこ)

98 をばなちるふきあげのをを見わたせばよせてかへらぬ秋
のうら浪(秋二・薄・四三四九)

文永七年十首歌合、遠鹿

(中務卿のみこ御一)

99 しかのねぞふしみのくれにかよふなるあらしふくらしをば
つせの山(秋三・鹿・四七二四)

三百首御歌中

(中務卿のみこ鎌倉)

100 つくば山みねたちかくす秋霧のしたにかよひてしかやなく
らん(秋三・鹿・四八二九)

六帖題、不知

(中務の御子)

101 雨ならばやどもとるべきみちのべの霧こそいたく袖ぬらし
けれ(秋四・霧・五三九四)

御集、秋歌

(中務卿の御こ)

102 きえなばや草の葉つたふ白露の身をばうけくに秋の夕ぐれ
(秋四・露・五四六九)

萩の上の露、雲葉

103 夜もすがらをぎの葉風はたえせぬをいかでか露の玉とぬく
らん(秋四・露・五四八七)

五十首歌合御歌

- 104 ふるさとは夜さむになれやさぎ浪のあふみのをとめころも
うつなり（秋五・擣衣・五七七〇）
御集、林葉
（中務卿の御子鎌倉）
- 105 ははそちるはこねの山に吹く風はもみちをまける心ちこそ
すれ（秋六・杵・六〇六一）
六帖題歌合
（中務卿みこ鎌倉）
- 106 この夕あられまじりの時雨してさむきならはす木枯のかぜ
（冬一・時雨・六三八七）
六帖題御歌、水
（中務卿みこ鎌倉）
- 107 いかばかりさゆるあらしぞとませ河るでこすなみもゆふこ
ほりせり（冬二・氷・七一〇〇）
六帖題御歌
（中務卿御子）
- 108 久かたのあまつみ空は高けれどせをくぐめてぞわれは世に
すむ（雑一・天象・七六六五）
同（六帖題御歌）
同（中務卿御子）
- 109 げには又むなしき空のみどりこそありてなきよのためし也
けれ（雑一・天象・七六六六）
六帖題、塩煙
（中務卿御子）
- 110 興つ風吹きしく浦のしほ煙立ちのぼらぬやわが身なるらん
（雑一・煙・七九七八）
御集、都に帰りのぼらせ給うけるに、たかし山にて
（中務卿の御子）
- 111 富士のねはここをかぎりのなごりとてたかしの山にかへり
（中務卿の御子）
- みるかな（雑二・山・たかし山、高士、遠江・八四三六）
同（六帖）題御歌中
（中務卿のみ子）
- 112 槇のたつあら山おろし猶さえてくにのみやこはあは雪ぞふ
る（雑二・山・あら山、荒、和泉又豊前・八七三七）
六帖題御歌、子日
（中務卿のみこ鎌倉）
- 113 いにしへのねのびいくよとなりぬらんふりてひさしきしげ
をかおの松（雑三・岡・しげをか、茂、大和・九二二一。「ひさし
き」、底本「さひしき」を永青文庫本により改める）
六帖題御歌、くるま
（中務卿のみこ鎌倉）
- 114 人ごころ車をくだくみちなればたれかうきよをやすくすぎ
ける（雑三・路・車をくだくみち・九三〇五）
六帖題御歌、いはくに山
（中務卿のみこ鎌倉）
- 115 いはくにの山のあらみちたむけしてこゆるけふしもそらの
しぐるる（雑三・路・あらみち、いはくに山・九三二九）
同（御集）
（中務卿のみこ鎌倉）
- 116 人しれぬこころへだつないはでのみ年月すぐするでの中み
ち（雑三・路・井での中みち・九三三七）
六帖題御歌
（中務卿のみこ鎌倉）
- 117 かりそめに舟もてあめるうきはしのかけてあやふきよをわ
たりつつ（雑三・橋・うきはし・九三六六）
秋御歌中
（中務卿のみこ）
- 118 八橋のあたりのさとの秋かぜにきつつなれにし衣うつなり
（雑三・橋・やつはし、三河・九四六二）
御集
（中務卿のみこ）

119 うかりけるみかののはしのくちもせでおもはぬみちによを
わたるらん

此の御歌は、宮にかへりのぼらせ給うけるに、と
ほつあふみにみかるといふはしをわたらせ給ふとて
よみ給けると云云(雑三・橋・みかののはし、遠江・九
五〇〇)

六帖題御歌

(中務卿のみこ鎌倉)

120 吹きさやぐよかぜをさむみおほがののたかはかりしきふし
ぞわびぬる(雑四・野・おほがの、大我、大和・九七三三)

御集、冬の朝

(中務卿のみこ鎌倉)

121 雪さそふみねのあらしのおとさえてや田のひろのはしもが
れにけり(雑四・野・やたのひろの、矢田、越前・九七五二)

御集、ときはのもり、なのみしてもみぢしたるを(「な
のみ」底本衍字あり)

(中務卿のみこ鎌倉)

122 ことわりにかはりける身か山しろのときはのもりもみぢ
するよは(雑四・森・ときはのもり、山城・一〇〇〇九)

六帖題

同(中務卿のみこ鎌倉)

123 人ぞうきあはづのもりにるさぎのみのげにとがとおもひ
なせども(雑四・森・あはづのもり、近江・一〇〇七七)

御集、桑門

(中務卿のみこ)

124 せりかはやたけだのさなへさのみなどよのうきふしのかず
をとるらん(雑四・田・たけだ、山城・一〇一四六)

同(六帖題)

(中務卿のみこ鎌倉)

125 あやまりはおもきいはほのみにしあれどしづまぬふねをた

のむばかりぞ(雑四・巖・一〇一九七)

六帖題御歌、蓬

(中務卿のみこ鎌倉)

126 いにしへも名をのみ聞きしわたつ海の蓬が島をたづねてし
かな(雑五・島・よもぎがしま・一〇四二二)

六帖題御歌

(中務卿のみこ鎌倉)

127 かこのしま松風たかくなつたづの声きくなへにあげぬこの
夜は(雑五・島・かこのしま、出雲又肥前或播磨・一〇四四七)

文永二年五十首歌合御歌

(中務卿のみこ)

128 山路より見えしが見えぬ夕かなかすみにけりなかさゆひの
島(雑五・島・かさゆひのしま、豊前・一〇四五〇)

御集、古来歌

(中務卿のみこ鎌倉)

129 夢の中に行きてや見まし返すてふ夜半の衣のうらの初しま
(雑五・島・浦のはつしま、撰津又紀伊・一〇五〇一。「返す」
底本「かくす」を永青文庫本により改める)

御集、衣の島

(中務卿のみこ)

130 いやましに夜寒にも有るか浪のうつころもの島の秋のうら
風(雑五・島・ころものしま、未国・一〇五四八)

六帖題御歌、むら雨

同(中務のみこ)

131 舟とむる入江の浪におとろへてむかし覚ゆる夜半のむら雨
(雑五・江・一〇六二四)

六帖題御歌

(中務卿のみこ)

132 さむく吹くつだのほそ江の塩風になくさ夜千鳥うらがくれ
つつ(雑五・江・つだのほそえ、播磨・一〇六七二)

御集、池

(中務卿のみこ)

- 133 なにと我あし間の池のみくりなは人くるしめに世にまじり
けん (雑五・池・あしまのいけ、撰津・一〇八二二)
御集、はまな川、遠江 (中務卿の御子)
- 134 はまながはみなどとはるかに見渡せば松ばらめぐるあまのつ
りぶね (雑六・河・はまな川、遠江・一〇九四〇)
六帖題御歌、ちかくてあはず (中務卿みこ鎌倉)
- 135 こころのみおきつのはまにひくあみのめにかけながらあは
ぬこひかな (雑七・浜・おきつのはま、和泉・一一八〇四)
御集、舟を (中務卿のみこ鎌倉)
- 136 あゆちがたあさこぐ舟のほのぼのとちたのうらべに浪よす
るみゆ (雑七・潟・あゆちがた、年魚市方、紀伊・一一九四四)
六帖題御歌、とまり (中務卿のみこ鎌倉)
- 137 しほかぜはあらくもぞなるからとまりのこのうらぶねこぎ
いづなゆめ (雑七・泊・からとまり、筑前・一一九九〇)
閑居百首御歌 (中務卿御子)
- 138 たなかみの山の木の葉にしぐれしてせたのわたりは秋風ぞ
ふく (雑八・渡・せたの渡、勢多、近江・一二三三三)
六帖題御歌、鳥 (鎌倉中務卿のみこ)
- 139 山檜や雪ふかからし此のゆふべむれて小鳥の里に出でたる
(雑九・動物・鳥・一二五六九)
六帖題歌、面かけ (中務卿のみこ)
- 140 山鳥のをろのかがみの霜ぐもりうき面かけをかけて恋ひつ
つ (雑九・動物・鷄・一二七三七)
同 (六帖題) (鎌倉中務卿のみこ)
- 141 我もしる大和にはあらぬには鳥の時しらでこそ音はなかれ
けれ (雑九・動物・鷄・一二七四七)
六帖題、みやこどり
- 142 いざさらばむかしをとはんみやこどりなにはほり江にいま
も鳴く也 (雑九・動物・都鳥・一二八五〇)
六帖題御歌、とら (中務卿のみこ鎌倉)
- 143 たれか今竹の林に身をすてんうゑたるとらはある世なり共
(雑九・動物・虎・一二九一九)
六帖題御歌、さる (中務卿のみこ)
- 144 あしびきの山のゆきあひになく猿の声のうへふむみねのか
けはし (雑九・動物・猿・一三〇一四)
六帖題御歌、魚 (中務卿のみこ)
- 145 しろきうをの御ふねのうちに入りしこそ代ををさむべきし
るし成けれ (雑九・動物・魚・一三二六〇)
同 (六帖題) (中務卿のみこ)
- 146 のどかなる春の日がたのうら浪にたひつるをぶねけふもい
づらし (雑九・動物・鯛・一三二九三)
六帖題御うたを、こけを (中務卿みこ鎌倉)
- 147 たにふかみとしふりにけり岩がねの苔の葉なびき山風ぞふ
く (雑十・苔・一三三三六)
六帖題御歌、あさぢ (中務卿みこ鎌倉)
- 148 このねぬるあさつゆさむみ水ぐきのをかあさぢに秋風ぞ
ふく (雑十・浅茅・一三三六一)
六帖題御歌、玉かづら

149 みやま木の末まではへる玉かづらとりつく方もいまはなき
身か (雑十・縷・一三三八六)

六帖題御うた、藻 (仲務卿のみこ)

150 とにかくに人の心はみだれものなびくとみるも頼まれぬか
な (雑十・藻・一三四六二)

御集、秋雨

151 雲の行く高ねのひばら音たててむら雨わたる秋のやま風
(雑十一・檜・一三九三八)

六帖題御歌、むろの木 (中務卿のみこ)

152 むかしへをおもへばとほしいはやどにねはふむろの木いく
よへぬらん (雑十一・粉・一四〇二三)

同 (六帖) 題の御歌、となり (中務卿のみこ)

153 いかにせんよつのとりの宿にだにかなしむ声のたえぬう
き世を (雑十二・隣・一四四二六)

六帖題御歌、こほり (中務卿のみこ)

154 東路やあまたこほりのその中にかまくらさかえそめ
けむ (雑十三・郡・かまくらのこほり、相模・一四五二四)

御集 (中務卿のみこ鎌倉)

155 夕だちの一むらすぐる草の葉におくしら露の玉の井のさと
(雑十三・里・たまの井のさと、山城・一四六二二)

六帖題御歌、こうばい

156 わぎもこが衣のさとの梅のはなさぞくれなぬの色もさくら
ん (雑十三・里・ころものさと、陸奥・一四七四四)

六帖題御歌、文 (中務卿のみこ鎌倉)

157 ときおけるみのりのふみをあはれわがさとりひらきて見る
よしも哉 (雑十四・文・一五〇七三)

六帖題御歌 (中務卿のみこ)

158 世をはかる人もあらばとものふのつばぬかしたるたちも
かしこし (雑十四・太刀・一五〇九七。「はかる」、「ぬかし」、
底本「はかり」、「なかし」を永青文庫本により改める)

六帖題御歌 (中務卿のみこ鎌倉)

159 たらちめのいさめしつゑのとしをへてよわるはさこそかな
しかりけめ (雑十四・杖・一五一一二)

六帖題御歌、くし

160 をとめごがつけのつまぐしきしもなどうき世の中に心ひく
覧 (雑十四・櫛・つけのつまぐし・一五四三〇)

六帖題御歌、とどまらず (中務卿のみこ)

161 袖をだにひきもとどめず玉ごろもたまたまきてはいそぐ君
かな (雑十五・衣・たま衣・一五五三六)

六帖題御歌、雑恋 (中務卿のみこ鎌倉)

162 うき恋はまだら衣のとかくにひとりというにやは袖もぬれけ
る (雑十五・衣・まだら衣・一五五五七)

六帖題御歌、あさ衣 (中務卿のみこ)

163 あふ事はにひしまもりがたにきるあさの衣のまどほなれ
とや (雑十五・衣・あさ衣・一五五六五)

六帖題御歌、あや (中務卿のみこ)

164 江のみなみ春ゆく水のいろふかくそめし衣手あやにきまほ
し (雑十五・綾・一五六四四。「きまほし」、底本「きかほし」を

永青文庫本により改める)

六帖題御歌

(中務卿のみこ)

165 おもへただけふのさぬののあさ衣きてもあひみぬむねのく

るしさ (雑十五・布・けふのさ布・一五六六〇)

布 (底本ナシ、永青文庫本による) 同 (中務卿のみこ)

166 しまなるいちめがもてるかちぬのの色ふかくのみ人をこ

ひつつ (雑十五・布・かち布・一五六六一)

六帖題御歌

(中務卿のみこ)

167 かけておるしづがあさはたあさましやまどほにだにも君が

きまさぬ (雑十五・機・一五六八八)

御集

(中務卿のみこ)

168 ながめやるうぢの川せの水車とことほにこそ君はかけけれ

(雑十五・車・みづ車・一五七二五)

六帖題御歌

(中務卿のみこ)

169 今日の日はいかりそへよと舟人のつしまのわたり風もこそ

たて (雑十五・碇・一五八七四)

六帖題御歌

(中務卿のみこ)

170 うら人のあみのひきづなうちはへてうけくにものかなし

きはなぞ (雑十五・網・一五九二七。「うちはへて」底本「う

ちかへて」を永青文庫本により改める)

六帖題御歌、やな

(中務卿のみこ)

171 いとふぞよ世にふる河のくだりやなかかるみくづはせきな

とどめそ (雑十五・魚梁・一五九三六)

六帖題御歌、ことのは

(中務卿のみこ)

172 をかたににかたちうつりし神代よりつたへてひさしやまと

ことのは (雑十六・神祇付社・うちとの宮、内外宮、伊勢・一

六一二九)

六帖題御歌、一首

173 この浜につりするおきなあはれなりくるまのみぎにたれか

のすべき (雑十七・翁・一六五三一)

翁

同 (中務卿のみこ)

174 深山よりいでてや君につかへましよつのおきないまもあ

りせば (雑十七・翁・一六五三二)

同 (六帖) 題御歌

(中務卿のみこ鎌倉)

175 君のため人をたづねばたらちねのおやにつかふる心をぞ見

む (雑十七・父・一六五六二)

六帖題御歌、うなる

(中務のみこ)

176 日くれぬと山路をいそぐうなるこが草かりぶえのこゑぞさ

びしき (雑十七・垂髪子・一六七四五)

○歌枕名寄 (万治二年刊本 東京大学附属図書館蔵 (E三二・五

八四))

中務卿親王

177 ただしきをまもるときけば石清水いとどたのみのふかくも

有るかな (山城国二・雑篇・石清水・一〇〇九)

雪

- 178 神も見よ北野の雪のあさばらけあとなきことになづもるる
身を(山城国四・北野・一四二六)
- 雪
- 179 さえわたる風もいくかになりぬらんけふこそ雪のふるの高
はし(大和国四・布留・高橋・二六四五)
- 紅葉
- 180 敷島やたかまど山のもみぢばのからくれなるにいかでみゆ
らん(大和国四・高田・山・二六五八)
- 181 さほ姫のかすみのころもたちこめてきならの里にはるさめ
ぞふる(大和国五・著檜山・里・二九〇五)
- 葛
- 182 あふ事はかた岡山にはふくずのなほうらめしき身のちぎり
哉(河内国・雑篇・片岡山・三四二九)
- 雁
- 183 初かりのうきておもひのありま山たつ夕ぎりの空になくな
り(撰津国二・猪名篇・有馬・山・四〇八二)
- 時鳥
- 184 いかにせんおのが五月を待ちえてもなほたまさかの山ほと
とぎす(撰津国四・雑篇・玉坂山・四四九八。底本作者名ナシ、
『校本 誦枕名寄』による)
- 185 夏と秋行きかふおふのうらなしにかた枝すずしきおきつし
ほかぜ(東海部一・伊勢国上・伊勢海篇・苧生浦。底本ナシ、『校
本 誦枕名寄』二四七一による)
- 186 たのむかけなほまよはすな有為の世をいでてむまるる寺と
- こそきけ(東海部三・参河国・出生寺・四九九七)
- 187 たちわたる浜なの橋の霧のまにうきたるふねやみなとなる
らむ(東海部三・遠江国・浜名橋。底本ナシ、『校本 誦枕名寄』
二七五八による)
- 188 身のうさの又とももなきたぐひかなをかべの里の杉のひと
もと(東海部四・駿河国・雑篇・岡部里・五二四三)
- 189 伊豆の海なみぢはるかに霧はれてしまじま見ゆる秋の夜の
月(東海部四・伊豆国・伊豆海 付沖小島・五三〇〇)
- 190 竹の下しばしたちよるほどだにもうきふししげき世をいか
にせん(東海部四・相模国・足柄篇・竹下・五二五二)
- 191 かへりきて又見むこともかたせ川にごれる水のすまぬ世な
れば(東海部四・相模国・雑篇・片瀬川・五三七五)
- 192 七夕のあふせのうらによる浪のよるとはすれど立ちかへり
つつ(東海部五・常陸国・会瀬浦・五六六六)
- 193 汲みてしる人しもあらばさめが井のきよき心をあはれとや
みん(東山部三・近江国下・醒井・六四七二)
- 194 うきに今せきもとどめぬなみだとてなくこゆるふはの
中山(東山部四・美濃国・中山・六五一五)
- 195 花はなほ名のみなりけりひとへ山八重にかさなるみねのし
ら雲(東山部四・信濃国・一重山・六六五一)
- 196 降る雪のいろのはまべのしろたへにそれともわかぬむらち
どりかな(北陸部・越前国・色浜・七四〇八)
- 松
- 197 からことのきこゆる波に舟とめてまがふはうらの松の夕か

ぜ（山陽部下・備前国・唐琴泊・八一八八）

擣衣

198 おと^をなしの里の秋風夜をさむみしのびに人やころもうつら

ん（南海部・紀伊国・音無・里・八四五四）

199 秋ちかき程ぞしらるる夕づくひ入るさの山の松風のこゑ

（未勘国上・入佐山・九三〇五）

○六花和歌集（島原図書館蔵松平文庫本（一三二・八））

中務卿

200 雪ならばいくたび袖をはらはまし花の冬吹の志がの山ごえ^へ

（春・二七二）

（中務卿親王）

201 秋のよの月の鏡のきよければ箱ねの山の箱^{箱敷}さへぞ敷く

（秋・七九二）

（なかがわひろお 徳島大学総合科学部）

（おがわ たけお 慶應義塾大学大学院）